

感情表現と配色パターン

Emotional Effect and Color Combination Patterns

潘 杰 東京芸術大学大学院美術研究科 Pan Jie

はじめに

この発表は、色彩の感情表現作品の分析結果による「快」「不快」などの感情表現の配色パターンの基本例を検討したものである。

色彩の感情表現作品の分析は、すでに97、98年の色彩学会で発表したように昭和33年から昭和47年かけての東京芸術大学、女子美術大学の学生による感情表現作品を対象として、ミノルタ社の2次元測色システムCI-1040iによって測色し、「快」と「不快」2系列に分けた作品を分析して、はっきりした結果が得られた。その分析結果から本発表の基本配色パターンを得た。

方法(手続き)

1、感情表現作品の色彩分析は、作品の色彩要素だけに注目して、形、構図、またその他の要因を除外した、明度、色相、彩度の3属性の他に面積比率が重要な働きを果たしていることが見出された。多色による「快」、「不快」などの感情を表現する場合、色だけの範囲で考えると、画面全体の使用色の3属性の三つの要因は色彩情報の特徴を現わす基盤条件となる。もう一つ面積比率の要因が、骨格を与え色彩情報の意味バランスを左右するキャスティングボートを握っているといえる。言いかえれば、一つの作品の上に大面積比率を持つ色の特性(属性)がその作品の基本的な性質となり、面積比率の小さい色の特性(属性)はその作品に対してニュアンスや深みを与える味つけの役割を果たしていると考えられる。

2、「快」と「不快」などの感情表現の画面全体の基本要因となる3属性の特徴の分析結果に基づき、感情表現の画面全体の面積比率を考慮に加えて、「快」、「不快」、「喜び」、「怒り」の表現の配色パターンの基本特徴を検討した。

分析によれば、表現する感情の種類によって画面全体の3属性色相、明度、彩度の中に基本的な要因があり、その以外の属性が附随(副次)的な要因となる。

3属性については、感情表現に対してもっとも重

要であり変化が許される可能性が少ない第一要因。変化の許容される第二要因。もっと大きな変化を与えることのできる第三要因が考えられる。

その考えから、画面の基本特徴になる大部分の色を中心にして、その中の感情表現の第一要因の属性を不変の要素と仮定して、第二、第三の要因の変化による可能性を考えることができる。もちろん、実際の作品では小面積色も感情表現に対して重要であるが、その変化の可能性に対する検討は、ここでは省略して、もっとも基本となる色の骨組みとなる組合せを考え、それを次頁の表に示した。

得られた配色パターン

表に示す配色パターンは、明度、色相、彩度の特徴に対して、最小値から最大値まで高、中、低三段を分けて表わしている。画面上の色面積比率は明確に画面の基本特徴になる大面積の色と画面に対して影響が小さい小面積の色の2部分に分けて表わしている。

「快」の配色パターンでは、明度が第一要因で、その特徴は明るいことにある。色相は第二の要因で、その主な特徴は黄、黄赤、黄緑領域の色相である。彩度は第三の要因で、はっきりした特徴はなかったが、「不快」の表現よりも高い傾向がある。第一要因の明度を一定にする場合、第二の要因の色相、第三の要因の彩度の変化によって、「快」の表現の配色パターンは21のケースが考えられた。

「不快」の配色パターンでは、明度が第一要因で、その特徴は暗さにある。色相は第二の要因で、主な特徴は紫、青、青緑領域に偏る。彩度は第三の要因で、はっきりした特徴はなかったが、「快」の表現より低い傾向がある。第一要因の明度一定の場合、第二の要因の色相、第三の要因の彩度の変化によって、「不快」の表現の配色パターンは30ケースが考えられた。

「喜び」の表現の配色パターンは、色相が第一要因で、その特徴は黄赤、黄、をはじめ、青緑、黄

緑、紫など、より広い領域の色相が使われることにある。彩度は第二の要因で、高彩度色が特徴である。第三の要因の明度は広範囲である。基本要因の色相の特徴を一定にする場合、第二の要因の彩度、第三要因明度の変化を加え、6ケースのパターンが考えられた。

「怒り」の表現の配色パターンでは、色相と明度とが第一要因で、その主な特徴は明度の低い赤、黄赤、青、黒の領域の色である。彩度は第二の要因で、特徴は低彩度であることである。基本要因の明度と色相を一定にした場合、第二の要因の彩度の変化を加え、3ケースのパターンが考えられた。

参考文献

1) 神作順子：“色彩感情の分析の研究—2色配色の場合”，心理学研究，34，pp1—12（1963）

2) 納谷嘉信他：“3色配色の Semantic Differential 法による感情分析（その3各配色感情の因子評点と物理量との対応）”，電気試験所彙報，32，pp221—238，（1968）

3) 納谷嘉信：“配色感情次元，配色嗜好感情の個人差，面積比，配色”，新編色彩科学ハンドブック，p.675（1998）

4) 細野尚志著・財団法人日本色彩研究所編：カラーライブラリーデザイナーズカラーシリーズ，“カラーハーモニーパレット7，「配色の感情効果とカラーハーモニー」”大旺堂（1964）

5) 22) 小林光夫：“色彩美の探求-配色の問題へのアプローチ”カラーフォーラムジャパン`95論文集 p.37-44-90（1995）

6) 潘杰，“色彩の感情表現作品の画像分析—原作品と写真データの測定結果への影響の比較”，日本色彩学会誌，Vol，22（1998）

「快」の感情表現の配色パターンの代表例

番号	大部分の大部分の色（画面の基本特徴）			小面積の色 （画面の味つけ）
	基本要因	第2要因	第3要因	
1	{ 明度（高）+ 黄緑 + 黄 + 赤黄 + 彩度（高） }	+	{ 小面積色 }	
2	{ 明度（高）+ 黄緑 + 黄 + 赤黄 + 彩度（中） }	+	{ 小面積色 }	
3	{ 明度（高）+ 黄緑 + 黄 + 赤黄 + 彩度（低） }	+	{ 小面積色 }	

「不快」の感情表現の配色パターンの代表例

番号	大部分の大部分の色（画面の基本特徴）			小面積の色 （画面の味つけ）
	基本要因	第2要因	第3要因	
1	{ 明度（低）+ 紫 + 青緑 + 黒灰 + 彩度（低） }	+	{ 小面積色 }	
2	{ 明度（低）+ 青 + 青緑 + 黒灰 + 彩度（中） }	+	{ 小面積色 }	
3	{ 明度（低）+ 紫 + 青 + 青緑 + 黒灰 + 彩度（低） }	+	{ 小面積色 }	

「喜び」の感情表現の配色パターンの代表例

番号	大部分の大部分の色（画面の基本特徴）			小面積の色 （画面の味つけ）
	基本要因	第2要因	第3要因	
1	{ 色相（黄+赤黄+赤+ 紫+緑+黄緑） + 彩度（高） + 明度（高） }	+	{ 小面積色 }	
2	{ 色相（黄+赤黄+赤+ 紫+緑+黄緑） + 彩度（高） + 明度（中） }	+	{ 小面積色 }	
3	{ 色相（黄+赤黄+赤+ 紫+緑+黄緑） + 彩度（高） + 明度（低） }	+	{ 小面積色 }	

「怒り」の感情表現の配色パターンの代表例

番号	大部分の大部分の色（画面の基本特徴）			小面積の色 （画面の味つけ）
	基本要因	第2要因	第3要因	
1	{ 明度（低）+ 黄緑赤 + 緑青 + 黒灰 + 彩度（高） }	+	{ 小面積色 }	
2	{ 明度（低）+ 黄緑赤 + 緑青 + 黒灰 + 彩度（中） }	+	{ 小面積色 }	
3	{ 明度（低）+ 黄緑赤 + 緑青 + 黒灰 + 彩度（低） }	+	{ 小面積色 }	